

## 年報『人文社会論叢』創刊によせて

愛知県立大学人間の尊厳と平和のための人文社会研究所は、2021年4月に産声を上げたばかりの新しい研究所です。わたしたちは人間の尊厳と平和の追求を根底に据え、人々の社会生活における思想・慣習・規範・組織によって立つ原理や、それらが機能するための要件や環境を解明することを目的としています。そのために、①地域の多元性の創出、②地域の中の異文化の再発見、③地域から提唱する人間の尊厳と平和のための人文社会研究という3点を、全体の研究テーマに掲げています。

研究所のメンバーは、日本文化学部を中心として外国語学部、教育福祉学部の3学部に所属する学内教員17名（井戸 聡、伊藤伸江、内田純一、大塚英二、上川通夫、久保蘭愛、今野 元、柴田陽一、洲脇武志、竹中克行、中西啓太、中根千絵、野村仁子、服部亜由未、樋口浩造、丸山裕美子、本橋裕美）と、学外や国外の研究者7名（井上さつき、加藤泰史、南郷晃子、服部光真、阪野智啓、Joos Joël、Carlos Pérez Fernández-Turégano）の総勢24名です。本学の人文社会研究を縦横に発信したいという思いのもと、関係者に呼びかけを行ったところ、想定以上に多くの方々から賛同を得ることができました。

今年度は研究所全体としては、4月の所員会議に加えて、6月・9月・12月・3月に4回の全体研究会を開きました。また、後述する4つの班ごとに地域研究を行うと共に、全体の研究テーマとかかわる個人研究も進めてきました。このような研究所の成果を発表する媒体として、このたび年報『人文社会論叢』（ISSN：2436-682X）を創刊します。

従来のような紙媒体ではなく、愛知県立大学学術リポジトリ上で公開するオンラインジャーナルです。紙媒体の利点も十分に承知していますが、わたしたちの研究成果をひとりでも多くの読者に届けたいとの思いから、敢えてオンラインジャーナルという刊行形態を選択しました。本誌に掲載する各論考が人文社会研究の発展にいささかなりとも役立つことを願ってやみません。

続いて、2022年3月時点で活動を行っている4つの研究班を紹介していきます。

第一班は三遠南信と呼ばれる、愛知・静岡・長野三県の境界地域を対象として研究を進めています。形式地域である県境や市町村境を相対化して、歴史学・地理学・社会学などの視点から三遠南信地域の特徴を明らかにすることを目的としています。班員は井戸、上川、今野、柴田、竹中、中西、野村、丸山の8名です。

今年度は9月に愛知県北設楽郡、いわゆる奥三河で現地調査を実施しました。参加した8名各自が研究テーマを設定して調査に臨み、一部は共同で一部は個別にフィールドワークを行いました。たとえば、「コロナ危機下の花祭り」というテーマで研究を行った今野を中心に、東栄町教育委員会で古戸保存会、設楽町教育委員会で津具保存会の方から詳細な聞き取りをしました。その成果は【調査報告】「コロナ危機下の民俗祭礼：奥三河花祭の現地調査」として本誌に掲載しました。

第二班は愛知県立芸術大学文化財保存修復研究所と連携し、文化財の保存と活用というテーマで長久手市や豊田市などを対象とした研究を行っています。班員は大塚、上川、阪野、丸山の4名です。

今年度は長久手市の教圓寺所蔵の襖絵下張り文書（100点ほど）を借り受け、その解読を進めています。これにより教圓寺にかかわる由緒を明らかにし、併せて近世以来の

地域社会の有り様について考察することができるはずで。今後、豊田市（旧下山村）の須賀神社においても同様の調査を実施する計画です。また、第2班は11月に愛知県立芸術大学で開催された《災害と文化財》講座シリーズ第6回「長久手にまつわる文化財」に「協力」という形で参加しました。

第三班は愛知県立大学の学長特別研究費の助成を受け、文物の移動と地域社会史というテーマで碧南市や湖西市を対象とした研究を展開しています。班員は伊藤、柴田、服部（亜）、服部（光）、本橋の5名です。さらに学長特別研究費の研究グループ構成員である平野仁也、豆田誠路の2名も研究に加わっています。

今年度は静岡県湖西市の本興寺や碧南市の称名寺で古文献調査を行い、その成果を9月に蒲郡市博物館のコーナー展示「鶴殿氏ゆかりの『源氏物語』と鷲津本興寺の典籍」として発表しました。詳細な解説リーフレットや博物館の方々の尽力もあって小規模ながらも充実した展示となり、『源氏物語』の知名度の高さも手伝って中日新聞など各紙で紹介されました。地域・歴史・文学という人文社会学的横断による展示となった点だけでなく、そこから地域の人々とのつながりを創出できた点でも意義あるものであったと考えています。第三班の研究成果の一部は、【研究ノート】「三河国大浜村時宗寺院称名寺と柳宮連歌伝承」、【史料紹介】「本興寺本『源氏物語』初音巻翻刻」として本誌に掲載しました。

第四班はキリシタンと地域社会というテーマで一宮市などを対象とした研究を進めています。各種のキリシタン関係資料を再検討すると共に、キリシタンとその表象の地域社会における意味を問い直すことを目的としています。班員は大塚、中根、南郷、服部（光）の4名です。

今年度は一宮市立図書館所蔵の森徳一郎氏資料の再検討を行っています。同資料には1930年代の『一宮市史』編纂に際して郷土史家の森氏が収集したキリシタン関係資料の写しや同氏自身の著作物が含まれています。この資料の読解を進めたり、寺院などに残された原本調査を行ったりすることにより、異文化間接触の賜物である隠れキリシタンの布教用ノート『吉利支丹抄物』のような貴重資料の発見を目指しています。

以上4つの研究班の研究成果は、来年度以降も本誌や『愛知県立大学日本文化学部論集』、『愛知県立大学外国語学部紀要』をはじめとする各種媒体で発表していく予定です。どうぞご注目ください。

個人研究の成果としては、【論文】「Spanish Indies Legislation as a model for the protection of human dignity」および「魔女概念の確立」、【史料紹介】「京都大学人文科学研究所所蔵『天地瑞祥志』第廿翻刻・校注（上）」、【実践報告】「愛知県祭礼紀行（余寒の巻）」を本誌に載せることができました。コロナ禍にもかかわらず、着実に研究を進めたメンバーによる充実した論考ばかりです。

最後に、来年度も読み応えのある年報『人文社会論叢』を皆さまにお届けできるよう、わたしたちはこれからも研究を続けていきます。読者の皆さんには、本誌ならびに各論考に対する率直なご意見をお寄せくださることを切に願っております。

それでは、また次号でお会いしましょう。

2022年3月

人間の尊厳と平和のための人文社会研究所 所長 柴田陽一